2016年12月20日発行（3・6・9・12月20日 年4回発行）通巻243号　ISSN 0289-6478

組合役員をサポートする実用情報誌

電機ジャーナル

電機連合
http://www.jeiu.or.jp/

DENKI JOURNAL

新春対談

元プロ野球選手
宮本慎也 × 野中孝泰
電機連合中央執行委員長

手を抜かず、常に考え、目標を高く持ち、
「脇役の一流」としてチームに貢献する

vol.243

NEW MEMBER
三洋テクノソリューションズ鳥取労働組合

広報委員スコープ season2 輝く電機の仲間たち ❶
山洋電気テクノユニオン
「パートタイマーだけの労働組合」をつくった人たち

風が吹けば組合（ぼくら）はどうなる!? ❷
総合労働条件改善闘争に〝円〟の動きが影響する!?

INSIDE ▶OUTSIDE
労働：大澤 賢
常磐線の2020年全線運転再開に向け挑戦するJR東日本

政治：伊藤 惇夫
小池劇場。次なる演目は?

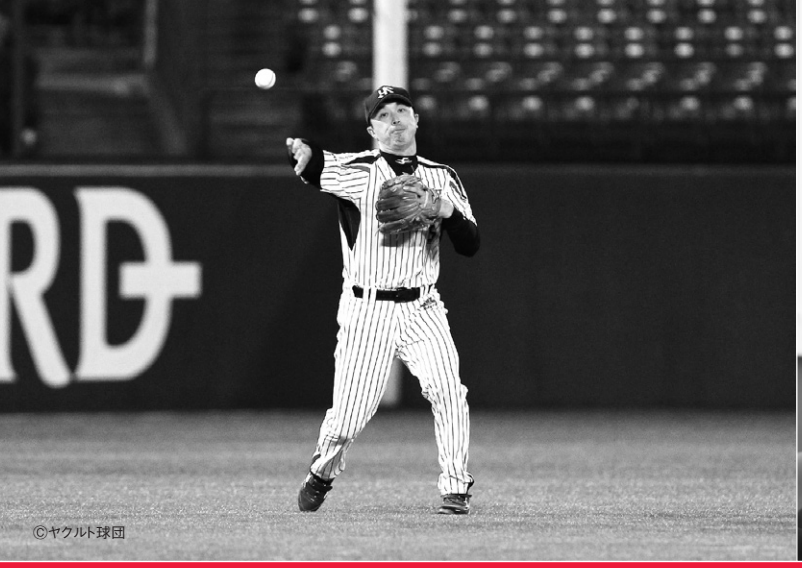
経済：高成田 享
トランプのアメリカ安保からめ日米貿易摩擦が再現

WE ARE ONE　衆議院議員 大畠 章宏
「共生社会（ALL FOR ALL）」建設をめざす

地協探訪
神奈川地方協議会

INFORMATION
みなさんの声が国政に届きました
矢田議員、安倍総理に迫る！

大使館便り fromマッキー ⑩
在英国日本国大使館 一等書記官 斎藤 牧人



新春対談

元プロ野球選手
宮本慎也
×
電機連合中央執行委員長
野中孝泰

手を抜かず、常に考え、目標を高く持ち、「脇役の一流」としてチームに貢献する

新春対談

守備の名手に贈られるゴールデングラブ賞を獲得すること10回、一流バッターの証である2,000本安打も達成した名手、宮本慎也さん。プロ野球生活19年間で個人として輝かしい勲章を手にするだけでなく、日本代表チームではキャプテン、労働組合日本プロ野球選手会会長も務め、リーダーとして存在感を示してきた。組織力を大事にする野中委員長が、リーダーシップやチームワークなどについて宮本さんと語り合った。

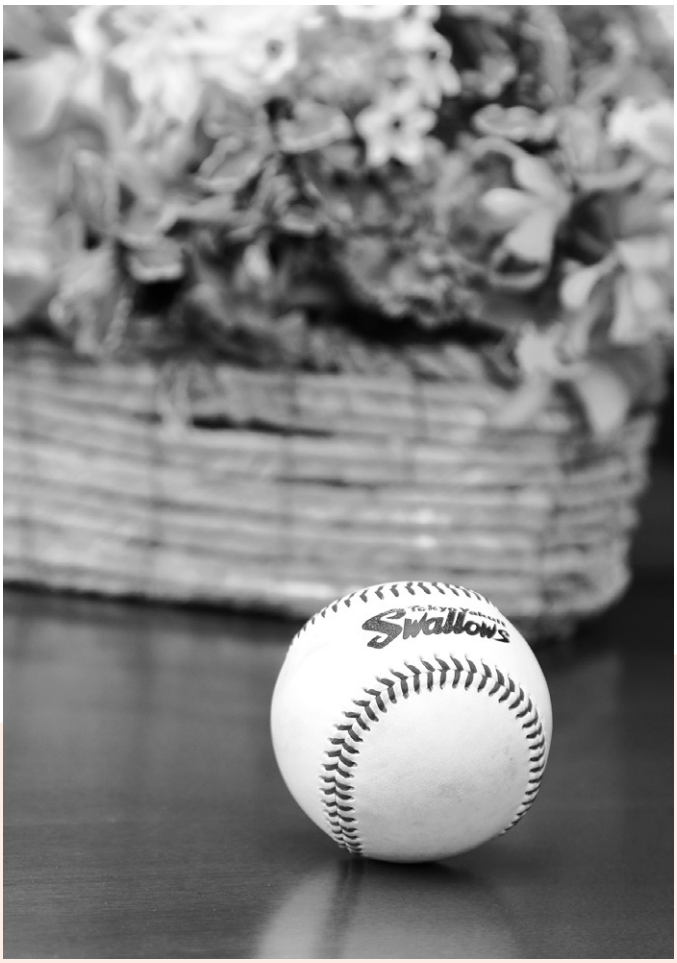
プロとしての道を示した野村監督のひと言

野中　明けましておめでとうございます。

宮本　おめでとうございます。

野中　わたしたち電機連合は約600の組合、約56万人の組合員が加盟する産業別労働組合です。電機産業は人々の豊かな生活を支え、社会の発展に貢献する産業であり、これからもっと世界に向けて伸ばすべき産業なんです。その分、世界的にも大変激しい競争が繰り広げられています。そんな中での競争力の源泉はやっぱり「人材」だと思っています。今日はぜひ、宮本さんにリーダーシップやチームワーク、人材育成についてお話をお伺いしたいと思います。まずは、宮本さんがプロ野球という道を選ばれた理由を教えていただけますか？

宮本　たくさんのジャンルから野球を選んだというよりは、運よく一番好きで情熱を傾けられるものに最初に出会った、という感じなんです。父が大の巨人ファン、長嶋茂雄ファンで、小さい頃からキャッチボールをよくしていました。小3の時に野球チームに入ってからプロに憧れ、中学生になってからは甲子園に出たいという夢も生まれてPL学園へ（1987年第69回全国大会優勝）。大学、社会人を経てヤクルトスワローズに入団しました。



野中　小中高、大学、社会人と、一筋に野球を続けてこられた原動力は何だったのですか？

宮本　高校からプロにいく道もありますが、僕には声がかからなかったんです。ただ、不思議と「俺はプロにはなれないのかな」とは、露程（つゆほど）も思いませんでした。今は無理でも4年後にはドラフトに名前があがる選手になると信じて大学に進みました。格好よく言えば純粋に、ひたむきに、という表現になりますが、単純に馬鹿だっただけかもしれません（笑）。

野中　小学生の頃からの夢が実現したとなれば、プロ入りはすごく大きな感動だったのではないですか？

宮本　どちらかといえば不安が9割でした。プロになっただけでは意味がありません。活躍できなければ飯は食えませんから。うれしい、やっとプロになれたという喜びはほんの少しでした。

野中　失礼ですが、宮本さんはスリムだし上背も平均的ですよね。プロ野球の世界ともなれば、周囲は大きくてパワーのある人ばかりだったと思います。競争に勝つのは大変だったのではないですか？

宮本　当時の僕のアピールポイントは「守備」でした。正直、初めてプロの練習に参加した時から「守備力なら誰にも負けていない」という自信を持っていました。だけど同時に、体格、体力、走力、バッティングと、守備以外のすべてが劣っているとも思ったんです。10年間続けて初めて成功と言われるプロ野球の中で、どうしたら生き残れるか。足りない部分を伸ばすために、ウエイトトレーニングもしたし、誰にも負けないくらいバットを振りました。

野中　相当な努力をされて、存在感を示し、競争に勝ち、レギュラーになったんですね。

宮本　あとは、プロになって初めて出会った監督が野村監督だったことも大きかったですね。野村監督にはプロ野球選手として生きる術を一から叩きこまれました。毎日、毎日叱られながら（笑）。ある日のミーティングで「脇役の一流をめざしなさい」と言われたんです。主役として活躍したい気持ちはみんなが持っていますが、与えられた役割をきちんと果たせ、と。極端にいえば、打てなくてもしっかり守ってチームのために動けば認めてくれる監督でした。あの言葉があったから、僕は努力をする方向を見誤らなかったんです。野村監督と一緒に野球をしたのは初めの4年間だけでしたが、この時間がなければ、後々19年間もプロ野球選手でいることはなかったと思います。

野中　指導される方の存在は大きいということですね。一方で、その指導がプラスになる、と自分でも信じないと成長はしませんね。仕事でも「あの先輩のように働きたい」という信頼が置ける人、目標となる人との出会いは大事なことだと思います。宮本さんと野村監督のように、二人三脚な関係は理想的ですね。

宮本 慎也　みやもと しんや

元プロ野球選手。元日本プロ野球選手会会長。現在は野球解説者や評論家として活動。
1970年生まれ、大阪府出身。PL学園、同志社大学、プリンスホテルを経て、1995年ドラフト2位で東京ヤクルトスワローズに入団。2013年の引退までの19年間で、通算2,133安打、通算408犠打を記録。ベストナイン1回、ゴールデングラブ賞10回を獲得（遊撃手として6回、三塁手として4回）。アテネオリンピック予選アジア選手権ではMVPに選出。アテネオリンピック・北京オリンピック野球日本代表ではキャプテンを務めた。

©ヤクルト球団

壁にぶつかった時こそ成長のチャンス

野中　宮本さんは著者などで「自己分析」の重要性を説いていますよね。

宮本　長所を伸ばすのか、短所を補うのか、指導法についてどちらがいいのかとよく聞かれますが、僕は両方だと思っています。どちらかを選ぶことは、逃げているように思うんです。長所は長所で伸ばすべきだし、短所は短所とわかっているなら直す努力をしないと。野村監督の教えもそれに近いものがありました。

野中　野村監督の指導では、他にどんなことが心に残っていますか。

宮本　よく「準備」といいますが、自己分析したうえでないと本当の意味で「準備」とは言えないということも印象的でした。たとえば、自分がどんなタイプのバッターなのか自分でしっかり分析ができていれば、ピッチャーがどう攻めてくるのかを予測できます。ただ、野球は相手がいる勝負事なので、自己分析をしたからといって必ずいい結果が出るとは限りません。そういう壁にぶつかった時に「変化する勇気を持ちなさい」という助言も大きかったです。

野中　おもしろいですね。というのも、会社生活の中でも同様のことが言えると思ったからです。

宮本　たとえば、2割5分の打率が数年続いた時、3割を打てるくらいの変化を求めて自分を変える勇気を持ちなさい、ということです。これは、簡単そうで、意外と難しいんです。スタイルを変えたために2割も打てなくなることもありますから。その恐怖に襲われて、自分のスタイルを変えられない選手は多くいます。その時に、ガラッと自分のスタイルを変えられないとプロとして通用しないとおっしゃっていました。

野中　壁にぶつかった時、それは新しいドアでもあるんですね。そのドアの向こう側が新しいスタートにもなる。意識の持ちようで次のステップにつながるということですね。

野中 孝泰　のなか たかひろ

1962年生まれ、福岡県出身。松下電器労働組合連合会（現パナソニックグループ労働組合連合会）副中央執行委員長、電機連合副中央執行委員長・書記長を歴任、2016年より現職。学生時代はバスケットボール部に所属。

宮本　そうですね。結局、現れた壁を打ち破らずに逃げていると、また同じ壁がどこかで現れてしまいます。調子が悪い時は気分転換をするという人もいますが、僕は24時間、面と向かって考えたほうが自分の力になると思っています。気分的には滅入りますけど、上手になるチャンス、今よりレベルが上がるチャンスと思って立ち向かってきました。

野中　壁に立ち向かうための気持ちの整理がついたとしても、やみくもに走ってはブレークスルーできないと思います。具体的にはどのようなことを心がけていたのでしょうか？

宮本　その時に大事なのが「自己分析」です。なぜ打てないか、自分のどこに欠陥があるか。結局は自己分析から始めると、次にすべきことが見えてきます。冷静に、一歩引いて。変化をする時は、より厳しい目で自己分析をしなければいけません。おっしゃられたように、やみくもに練習するのではなく、悪い部分をしっかり把握して、それに対する準備をまた考えることです。

野中　普段からＰＤＣＡサイクルが回っているということですね。どんなサイクルでＰＤＣＡを意識されていたのですか？

宮本　1年ごとに反省をしていました。シーズンが終われば来年の目標を決め、11月のオフから準備を始め、2月のキャンプで試し、3月のオープン戦でどの程度自分のものになっているかを分析します。やってきたことが間違っていることもあるので、そういう時はシーズン中であろうと変えるようにしています。頑固になりすぎると、変化するチャンスを逃すことになりかねないですよね。

野中　そうやって常にＰＤＣＡを意識されるところがプロのゆえんかもしれませんね。

宮本　プロで活躍する選手はモノが違うんですよ、僕なんかと比べても（笑）。ただ、本能だけで成功する選手もいますが、基本的には24時間野球のことを考えて生活している人のほうが活躍していると思います。

犠牲心を持った「個」が集まり勝てる「集団」へと変わる

野中　宮本さんはヤクルトスワローズではリーダーであり、五輪代表ではキャプテンとしてチームを牽引してこられました。チームのパフォーマンスを上げるために意識されていたことは何でしたか。

宮本　五輪代表はチームの勝利、メダルの獲得が至上命題ですが、選手一人ひとりがそれを理解していました。そういった共通意識を強めるのがキャプテンだと思っていましたが、口で言うのではなく行動で示すことを意識していました。自分の行動に注意して、できるだけ隙を見せず、気づいたことを遠慮なく言う。それはすべて、チームが勝つためです。

ところが、ヤクルトに戻れば事情が少し変わります。プロ野球というのは、極端に言えば、チームが最下位でも個人成績がよければ給料が上がる世界です。個人個人で向かう方向がバラバラになりがちですが、僕はチームが勝つことを基本線にして考えていました。そのためなら先輩にも遠慮なく発言するし、自分も変えるべきところは変えてきました。

ただ、若い選手には「自分のためにやりなさい」と言ってきました。彼らとレギュラーでは立場が違いますから。まずは1軍に残って、レギュラーを獲れ、と。チームを第一に考えてほしいのはレギュラーで、そうでなければバランスがとれませんから。

野中　日本代表チームでは勝利という明確な目標があって、おのずと全員が同じ方向を向くが、プロ野球の世界のそれぞれのチームでは個々人に目標や意識の違いがあるというのは、わたしたちが気づかない部分ですね。それでも選手を束ねていかないといけませんよね。

宮本　そこは監督の仕事だと思います。ただ、その中でも、勝利のために必要だと思えば遠慮なく行動してきました。それに、チームが勝てばみんなが喜びますから。「宮本は嫌われ役を買って出た」なんて言われることもありますが、勝ちたいから行動してきただけで、嫌われたくはありませんよ（笑）。

野中　リオ五輪では陸上男子４００ｍリレーで日本は銀メダルをとりましたよね。あれは、個人のタイムでは勝てなくても、バトンタッチの工夫などチームとしての努力でタイムを縮め、勝つことができました。野球もチームプレーを高めないと勝てないと思いますが、どのようにお考えですか？

宮本　ベストなのはみんなが犠牲心を持つことではないでしょうか。チームの勝利を優先して、個人成績よりも得点のチャンスをより広げることを優先できる選手かどうかという点を見てきました。

野中　なるほど。そうやってチームへの犠牲心というものに注目しながら観戦するのもおもしろいですね。選手のプレーの端々にそういった意識が見えた時は、リーダーとして叱ったり、助言なども必要になると思いますが。

宮本　最初はズバッと言っていたんですが、北京五輪の時から少し考えを変えました。あの時、特に年下の選手はしっかりコミュニケーションをとったうえでないと、納得しない人が多いと気づいたんです。僕はどちらかというとトップダウン型で「ついてこい！」みたいな感じでやっていたんですけど、やっぱり反発を生むんですね。後々、反省して思ったのは、上に立つ人は臨機応変さが必要だということ。十人十色といわれるぐらいですから、考え方が違う人たちを同じ方向に向かせるためには、言い方とか導き方があるのではないかと思います。それからは、この選手にはこういうふうに言い方を変えたほうがいいなとか、普段から選手を観察するようになりました。

野中　はじめは叱られることを疎ましく感じてしまう人もいますが、そういう人でも少しずつ「あの人の、あの時の助言があってよかった」と思える日が来るんですよね。職場でも叱らなければいけない場面がありますが、その言葉はその人のためであり、職場全体のためであり、それがお客様のためにもつながります。叱り方と同じように褒め方も難しいですが、そういったコミュニケーションの活性化がチームワークに結びつくのだと思いますね。

謙虚だから堂々と戦える それが日本の強み

野中　五輪やワールド・ベースボール・クラシック（ＷＢＣ）など国際試合の経験が豊かな宮本さんだからこその質問ですが、世界を相手にした時、日本の強みあるいは弱みはどんなところにあると感じましたか？

宮本　これは野球に限ったことではないと思いますが、野球界のためとか、日本で応援してくれる人のためとか、誰かのためにがんばれるところが日本人のよさではないでしょうか。それが強さというか、謙虚さであったり、素直さにつながっていると思います。たとえば、デッドボールを当てて「すみません」と帽子とるのは、アメリカではチキン（臆病者の意味の俗語）なんて言われるわけですよ。

野中　素直に謝ることが気が小さい、臆病だと見られるんですか。

宮本　そうです。だけど、当てるつもりがなかったから素直に謝れるのが日本人のよさだと思うんです。そういった謙虚さがあるから、後ろめたい気持ちを持たずに、勝負事にも正々堂々と戦えるんです。逆にウイークポイントを挙げるとしたら「対応力」でしょうか。

野中　海外ではグラウンドがデコボコだったり、とんでもない環境で試合をしなければいけないこともあるわけですよね。

宮本　海外の選手は、試合時間がちょっと早まっても「早く始まるの？　ラッキー」というくらいの感覚だと思うんです。僕らの感覚でいうと「せっかく調整してきたのに」という弱さの部分が出てしまう。スポーツでも事業でも、最近は海外に出て勝負するのが普通になってきたので、減ってはきたと思いますが、そういう環境の変化に対して、日本の選手のほうが少しナーバスな部分があるかなと思います。

野中　東南アジアを中心に、海外企業で働く外国人従業員を日本に招き、製造研修をすることがあるのですが、「日本に来て何を勉強するのですか」と尋ねると、集まった30人ほどの全員が「チームワーク」だと答えていました。モノというのはチームでつくります。自分のパーツだけやって「はい、終わり」ではなく、でき上がって初めて製品になるわけですから、チームワークが必要なんです。先ほど宮本さんがおっしゃったように、共通の目的意識のもと、それに向かってチームで動く。それが普通にできるのも日本人の強みじゃないかとも思います。

宮本　野球でも、先発ピッチャーが5、6回まで投げて「はい、終わり」と帰ってしまうのでなくて、9回まで終わって試合のよかったところ、悪かったところをみんなで共有することが大事だと思います。

野中　自分の役割、責任を果たしたという点では正しいと思うのですが、でも全部ができて終わりですからね。

宮本　正しいけど正しくないみたいな（笑）。

野中　精神的な図太さも必要ですが、日本人らしいきめ細かさ、ひとつのモノを全員でつくりあげるというチームワークは大切にしていきたいですね。

権利ではなく繁栄のために
選手会会長の覚悟と交渉術

野中　日本の活躍が期待される次回のWBCが3月に開催されますが、わたしたちはちょうどその頃に春闘を迎えます。宮本さんも労働組合にあたる選手会の会長をされていましたが、球団側との交渉はとても大変だったかと思います。

宮本　日本プロ野球史上初のストライキ（2004年）を決行した後だったので、共存共栄のためにも、事務折衝には頻繁に自ら出向いていました。とにかく、ファンが喜ぶプロ野球にすることが第一。折れるところは折れて、折れてもらうところはきちんと主張しました。ギブアンドテイクというか、野球界をよくするために交渉していきましょう、というのが僕の基本スタンスでした。

野中　現在の労使間での問題点は何だと思いますか？

宮本　僕の時は国内フリーエージェント（FA）の短縮でしたが、現在も問題は山積みだと思います。たとえば、海外移籍に関しても、移籍というのは何らかの圧力がかかるものです。国内FAでも、宣言したら元のチームに残留ができない場合があります。選手会としてはせっかくの権利を自由に使えてないという思いが拭えません。

野中　先ほどおっしゃられたように、プロ野球選手は個人事業主のような部分があると思います。選手会会長として、そういった方々を束ねるのに苦労されたと思います。

宮本　いろいろな意見があって当たり前なので、僕が考えていたのは、野球界はどうあるべきかということ。プロ野球選手も700人くらいいますから、全部の意見を吸い上げるのはたしかに大変です。野球界のために選手に目をつぶってもらうこともありました。だから、僕自身は恨みを持たれても仕方がないと腹をくくって交渉を進めていましたね。

野中　労使の協議はたくさんしますが、テーマによっては対立してしまうことがわれわれにもあります。対立した時こそ調和点を探りながら取り組みますが、その前提にある労使の信頼関係が非常に大事だと思っています。

宮本　もしかしたら、一般企業よりも野球界の労使関係は信頼感が弱いかもしれません。それは、プロ野球選手の実働年数が関係していて、契約更改にも表れます。選手と球団側とである程度の幅を持たせてテーブルにつきますが、その金額の開きはすごく大きいです。実働年数が短い分、選手は少しでもいい待遇を望みますから。

野中　要求と妥結の乖離（かいり）ですね。

宮本　僕は、ちょっと損するぐらいがちょうどいい、という考えなので、契約更改はほぼもめたことがないんです。選手会としての交渉もそうですが、選手側の権利をすべて得ようとすれば、当然、球団側は拒否します。そこで、こちらの最大の要求から少しだけ損するぐらいの着地点を図って交渉を進めてきました。

20年後、30年後、野球がもっと
愛すべきスポーツになるために

野中　現在、宮本さんは子どもたちに野球を教える活動に力を入れているという話を聞きました。今後の目標や夢などをお聞かせください。

宮本　引退してからは、監督や指導者になりたいという漠然とした夢があったんですが、野球離れが深刻になってきている今、野球普及のために自分に何ができるかを考え、幼稚園を回って野球を広める活動を始めたんです。僕は、野球は国技だと思っています。野球の存在感をもっと高めるために、決して大きな力ではないですけど続けていきたいと思っています。

野中　日本は超少子高齢社会を迎えているので、単純に分母が減っていくということも問題ですね。

宮本　分母が減るうえにサッカーやテニス、ゴルフ、最近はラグビーなども人気ですし、バスケットもプロ化がされて、子どもたちにも選択肢が増えました。「野球は大丈夫でしょう」とあぐらをかいていたら20年後、30年後は本当に危ないと思うんです。だから今から取り組むべきだと思っています。

野中　2020年の東京オリンピックでは野球が種目に選ばれましたね。プレッシャーを与えてしまうかもしれませんが、当然、金メダルが期待されています。

宮本　金メダルを期待されているほうが、アスリートとしてはやりがいがあります。大変なプレッシャーとなりますが、ぜひ金メダルをとってほしいですね。ただし、ここで金メダルをとっ

て終わりではなく、それからも野球をもっと愛されるスポーツにしていくことを考えることがとても大事だと思います。

野中　東京オリンピックという目先の問題にとらわれすぎず、もっとその先を見据える必要があると。

宮本　中長期と短期の目標が大事かと。1段ずつでも、着実にステージを上げていくことが、後々の大きな成長につながると思います。

野中　常に短期、中期、長期と課題を持って努力された結果が、個人成績や周囲からの信頼につながったんでしょうね。

宮本　僕は体格的に恵まれてなかったので、そんな自分がプロでどう戦っていくかを、ああだこうだと考えていかないと生き残れなかったんです。だから、自然と常に考える癖が身についたのかもしれません。その割に、勉強はまったくできませんでしたけど（笑）。

野中　今日は成長のために必要なことや、組織力を高めるヒントをたくさんいただきました。電機産業としても、野球やその他のスポーツをもっとエキサイティングにする技術を考えていかねばならないとも思いました。

本日は、本当にありがとうございました。